

新句構造文法と補文Wh痕跡問題など

— 形式文法も語用論と情報理論を取り込め —

田原 薫

0. はじめに

チョムスキー流の変形生成文法の世界には、うまく説明できない難問とされていた問題があり、同学派の活動が華やかだった時期には盛んに論じられたものの、教祖自身が従来の行き方を転覆させたような[1995]の枠組を出すに及んで、懸案のまま立ち消えになっているかのような問題の一つに、いわゆる「that-痕跡効果」と言われるものがある。

それは、(a) Who_i do you think t_i came first? / (b) Who(m)_i do you think (that) he saw t_i? のように疑問詞が従属節から主節の冒頭に取り出されたと見られる構文において、(a) は勿論OKで、(b) は that があってもなくてもOKなのに、(c)*Who_i do you think that t_i came first? がアウトなのはなぜか、という問題である。つまり(c)では「補文化子」 that がWh痕跡との隣接を拒否する効果をもつと考えられたのである。

実は、私の提案するSOOTh2によれば、そもそも(c)のような分析そのものが間違いである。私の枠組では that は「補文化子」などというゼロレベルの範疇ではなく、品詞所属には問題が残るにしても、それは who など疑問詞と同じ階層/位置を占める一つの指定辞だ、と見なされる。同一地位を巡って疑問詞と競合するから、当然隣接して現れないのだが、真に問題なのは、(b) で that が現れてもよい理由を解明することである。以下で認識文法・主語初頭生起図式による同類の難問の分析を試みよう。

1. 語用論的機能範疇の設定と指定辞の役割

まず、疑問詞補文をもつ構文と、所謂 that-痕跡効果が現れる構文を例示する。

- (1) I am thinking who came first. 【平叙文】
- (2) I am thinking who(m) he saw. 【平叙文】
- (3) Did you ever think who came first? 【普通疑問文=考えたか/考えなかったかを質問している】
- (4) Did you ever think who(m) he saw? 【普通疑問文=考えたか/考えなかったかを質問している】
- (5) Who do you think came first? 【Wh疑問文=wh語を充たす情報を講求している】
- (6) Who(m) do you think he saw? 【Wh疑問文=wh語を充たす情報を講求している】
- (7) Who(m) do you think that he saw? 【Wh疑問文=wh語を充たす情報を講求している】

さて、このようにSPEC5 として入った who/who(m) は真のAGs の指定辞としてではなく、(対格のwho(m)の場合は特に)単にAGs' と緩く並置された成分として置かれる。従って、縹緲は名目上の軟弱な範疇であり、網を被せて書いてある。副節はこの段階に留まる。

一方、主節の構造はどうかというと、副節にないQ Fという成分が上に掛かっている。'Q F' というのは仮称であって、一応'Questioner-Focalizer' 「疑問焦点化子」という心理的な機能範疇に当てたものである。或いは厳めしく'Information Status Operator' 「情報地位操作子」とでも呼ぶ方がよかったかもしれない。Q Fの主な機能はその配下語SPEC5 に働いてそれを「旧情報」以外の地位、すなわち「新情報」か「請求情報」に変えることにあり、そのように変わったSPEC5 は改めて配上語SPEC6 として地位づけられる。Q FはまたAGs' にも働いてその構造を疑問化、すなわち聞き手に情報を請求することを信号する形式に変える。英語で特有の助動詞 do はT (時制子) の位置に発生するが、これを含めて助動詞がQ Fに上昇編入されるのがそんな疑問化の形式である。その上にかかるべきSPEC6 が空白であれば、情報の請求はpolarityすなわち命題の真偽/成立の可否を問うyes-no question となる。もしそんな疑問化の形式も疑問詞もなく、Q Fが「新情報化」つまり話者から聞き手への情報の押し付けという素性を取れば、旧情報のSPEC5 は外転されてSPEC6 となり、情報資格が「新情報」に変わる。これは強調のprosody によって信号される。【実はこの句構造システムは感嘆文にも適用できる。各自試みられたい】

2. 主節・従属節の中の疑問詞の地位

さて、以上の構造を使って、主節単独の文'Who came first?' を分析すると、SPEC6 にはSPEC1→SPEC4→SPEC5 からQ Fによって請求情報化を受けた who が入る。次に、came はVがTに編入されたのではなく、むしろTとAGs がVに繰り下げ編入されたものと見たほうがよい。first は came の修飾語として付加される。

同じく主節単独の文'Who(m) did he see?' では、who(m)はSPEC2→SPEC5 からやはりQ Fの作用を受けてSPEC6 の請求情報となったものである。did はTに発祥したが請求情報化によってQ Fに編入された。he はSPEC4 であり、see はVの位置を動かない。以上見てきたように単節文のWh疑問文はこの構造でうまく分析できる。

次に副節(従属節)の中の疑問詞を見ていこう。ただし、副節が疑問詞とそれ以外の部分に(表層的に)分裂している複雑な(5)(6)(7)は後回しにして、副節が丸のまま出現する(1)~(4)を先に考える。この場合は副節は縹緲という軟弱範疇であり、表面的には一塊をなしていてもAGs' とSPEC5 との緩やかな並置であり、SPEC5 をWhが占めている。

ところで主節の動詞 think は情報を項として取るが、その情報は「確定情報」と「未確定情報」に二つに分かれることができる。まず情報は一括してAGo の位置に入るが、情報分割が起これば、Whを含まない確定情報はAGo の配下語SPEC2 へ、Wh語はAGo の配上語SPEC3 へと分けて収容されると考えられる。だから(1)(3)における who も(2)(4)に

おける who(m) も、副節のSPEC5 まで進出した上で、情報分割されて主節のSPEC3 の位置に收容されるのである。これが主節の旧情報の中核的地位を占めると認定されれば、Wh は上昇してSPEC5 にまで到達するが、そこでQFの影響を受ける場合も起こる。

もし副節から上昇して到達したSPEC5 に対してQFが「請求情報化」の力を作用させたならば、SPEC5 のWhは請求情報となってSPEC6 へ外転される。その過程は単節文の場合と同様である。従って(5)の who は副節のSPEC1 に発祥し、副節のSPEC4 からSPEC5 を経て、主節のSPEC3 に入り、そこから主節のSPEC5 を経て最終的にSPEC6 に昇進したものである。一方(6)の who(m) は副節のSPEC2 に発祥し、副節のSPEC5 を占めたのち、主節のSPEC3 に入り、そこからやはり主節のSPEC5 を経て最終的にSPEC6 の地位に就く。いずれの場合もQFの位置にはTから編入された do が現れる。SPEC4 には主語の you が入るが、旧情報の性格が強いと判断されれば、空部屋となったSPEC5 に移転してもよい。また副節の残余_{AGs'}[came first] / _{AGs'}[he saw Ø]は主節のSPEC2 に入ったままである。

3. Wh と that が相互排斥する理由

さて、論議はいよいよ大詰めに来た。異例な(7)を説明するためには that という語彙の性格を理解しなければならない。チョムスキーの諸理論では that は‘Complementizer’「補文化子」というゼロレベルの範疇とされたが、実はこれは(品詞の論議はさておき)SPEC6 の地位を占めるべき一種のQF指定辞だ、というのが私の考えである。

語彙 that はQFの指定辞であると考えたが、QFが[-~~謙~~謙、-~~新~~新、-~~旧~~旧]という値、つまり疑問でない平坦な情報性を取ったときに現れるものと仮定する。そして、これは当然、指定辞SPEC6 にWhを要求する[+~~謙~~謙]というQF素性と相容れないから、同じSPEC6 の位置には出現できないが、同時に理想的な平坦な情報は主節には起こり難く、概ね従属節に起こる現象であるから、that で先導される節は概ね従属節になるのである。そういう情報論的性格を that はもっているので、その節の内部に最終的に疑問詞を含んでいてはならないと考えられる。だから次の例文(8)は当然最終出力になり得ないことがわかる。(8) you think that he saw who(m)?

これは副節が情報分割されない(つまり請求情報化への準備を受けない)まま、QFPの位階まで到達し、SPEC6 として that が入り、全体が丸ごと主節のAGoの位置に收容された構造である。that と who(m)とは矛盾しているが、この段階から遅ればせに who(m)を摘出して that と遠ざけることができればその矛盾は軽減される。そこで一種の離れ技として who(m)の長距離移動が起こったと仮定してみよう。つまり、主節のAGoに收容された副節QFPの中から who(m)が抜擢されて一挙に主節のSPEC6 まで跳躍上昇する、と仮定するのである。例文の(7)はその結果であるが、それは派生の経済のため、と見ることができる。目的語のWhは主語のWhに比べて一旦SPEC5 に移動するのに手間がかかったので、それを省略する経済性が非常手段を支持したのである。

いま「目的語のWhは主語のWhに比べて一旦SPEC5に移動するのに手間がかかった」と述べたが、それは、[who(m)_i he saw t_i]のほうが[who_i t_i came first]などを産出するよりも大きな労力を費やすという意味である。ここで、同じく疑問詞の移動といっても、後者の場合が、たとえ疑問詞でないJohnのような名詞句であってもどのみち起こり得る、或いは起こらねばならない(SPEC4からSPEC5への)「外転」‘extroversion’であるのに対し、前者の場合は隣接しない指定辞の間(SPEC2からSPEC5へ)のスキップ移動である点に注目して頂きたい。「外転」というのは、たとえば図1で、それぞれ述語AG₀および述語AG_sから見てSPEC2, SPEC4を配下語‘Sub-Ject’と言い、同じくそれぞれの述語から見てSPEC3, SPEC5を配上語‘Superject’と呼ぶが、それぞれの述語の作用で配下語が配上語の地位に昇進させられること、すなわちSPEC2がSPEC3へ、或いはSPEC4がSPEC5へと地位が上がることを「外転」と呼ぶのであり、これが最もコストの小さい移動である。或いはこれを真の移動たるスキップ移動と別扱いにすべきかもしれない。「外転」は英語の難易文の生成などに関与するのを始め、かなり頻繁に起こるものであって、所謂 epistemic modal 助動詞の主語は「外転」によって産出されたものである【後述】。

以上のように、一旦(確定NPと同様)SPEC4の地位を占めたwhoは直ちに楽に外転されてSPEC5の地位に移るが、その地位は図1で見ると新しい述語QFのSub-Jectに相当する。そこでwhoはQFの作用によって再び外転され、請求情報という意味上の地位を付与されるとともに形式上は最上位の指定辞(Supreme Superject)たるSPEC6に位置づけられるのである。この過程にthatが介入する余地はまったくないから、that whoとかwho thatとかいった連鎖が単節内で生じる可能性はない。

もしwhoが主節内でなく、do you think…に統率される従属節内の起源であったとしても、そのwhoは従属節内で楽に最高位の配上語SPEC5まで昇進するが、請求情報という性格上、thatが現れるSPEC6までは昇進せず、従属節が情報分割を受けて、whoを顕示したほうの情報分枝は主節のSPEC3に収容され、主節のSPEC5を経て、主節のSPEC6に昇進するから、この過程でもflatな情報を指定するthatが現れる余地はない。

一方、目的語のwho(m)が関与した構文はどうなるか。単節文でこれがthatと共存し得ないのは、その文の機能が情報請求であり、flatな情報提供でないから当然であるが、複文でそのwho(m)がdo you think…に統率される従属節内の起源である場合、それが主節のSPEC6という最終地位に到達するまでには、i)まず副節内でSPEC2からSPEC5へとスキップ移動し、ii)情報分割されて主節のSPEC3に収容され、iii)そこからさらにスキップしてSPEC5, SPEC6へ移動する、という多大の労力を通常は必要とする。もちろんii)とiii)は主語のwhoの場合と共通であるが、問題はi)の苦労が加わる点にあり、さらにii)の情報分割も、本来の最高位指定辞たるwhoの場合と比べて難しいと推定しても無理がない。それに、請求情報たる疑問詞が元来「旧情報」であったことを考えると、心理的な省エネによる一挙上昇の結果副節のthatが残っても相対的に抵抗が少ない、と解釈できる。

4. too ... to VP 構文主語の兼務性とその意味機能

以下の節では、チョムスキーの枠組で難問とされてきた別の問題を考察する。

- (9) John is so clever that one cannot arrest him.
(10) John is so clever that he will not arrest a wrong person.
(11) John is too clever {Φ /for the police} to arrest φ.
(12) John is too clever to arrest a wrong person.

(11)は他動詞 arrest の後に当然期待される目的語がないので一応そこはギャップと認識されるのであるが、(12)のようにそこが有音の目的語で占拠されていると、主語 John のθ役割に関して(11)(12)で劇的に異なる解釈を受ける。すなわち、それぞれ(9), (10)ではほぼparaphraseされているように、John は(11)では受動者(悪賢くて逮捕できない)を演じ、(12)では能動者(賢いから誤認逮捕することはない)を演じるのである。(11)は表面的な文型の上では難易文 John is hard to arrest φ. に似ているが、難易文のように主語 John が元来φの地位から上昇してできたもの、と見なすことはできない。なぜならLangacker[1995]の主張にも拘らず、やはり先行文脈なしでの John is hard/easy. が理解困難で容認し難いのに比べて、John is (so/too) clever. は先行文脈がなくともまったくOKだからである。clever は to arrest/to be arrested のようなprocess 或いはevent を叙述する述語では元来なく、最初から人(物)を叙述する形容詞である。だから(9)~(12)を clever の後で打ち切っても完全にOKで、主語 John は何らかの上昇移動の産物ではなく、i) clever の被叙述項と、ii) arrest の目的語或いは arrest a wrong person の主語という二つの役割をその場で兼務しているのである。このようなことは、一位置一機能を原理とする変形文法の規範では説明し難いので、説明できないまま人間の神秘的な天賦の言語能力の顕現とチョムスキーは見なしたのである。

(11)(12)の分析がGB理論やMinimalist Programで難問となった別の理由は、それらの構文が副詞 too をその存立基盤として含んでいて、形式上 to arrest φ / to arrest a wrong person がその too の意味を限定する修飾語になっていることである。副詞はチョムスキーの理論体系では大きな穴になっており、さらに一般に修飾語という地位は、それが意味機能上不可欠であろうとなかろうと、範疇の投射レベルを上げない付加的な成分という理由で、形式文法の中では論じて面白くない成分として、チョムスキー派の人たちに軽視されてきた。「副詞」「修飾語」という個別概念からしてそうなので、まして副詞の修飾語となれば、虚を衝かれた彼らの近寄り難い神秘となるのは当然である。

さて、そのように変形文法が苦手とする too...to VP 構文をSOOTH2で分析することに成功すれば、その有効性と信頼性を世間にアピールすることになり、好都合なのであるが、「副詞とその修飾語」という表面的形式に囚われてはそれもうまくいかない。そこで、むしろ意味関係を機軸に据えて、John is too clever の方を意味的従属節、to不定詞句の方を意味的主節と見なす「発想の転換」が魅力的に映るのである。

実際、(9),(10)のかわりに (13)As John is so clever, one cannot arrest him. とか (14)As John is so clever, he will not arrest a wrong person. のように、主節・副節の資格を取り替えた文の方が(11)(12)の言わんとする真意に近いであろう。日本における学校英文法でも、「悪賢いから捕まらない(だろう)」「賢いから誤認逮捕はしない(だろう)」のように訳す(／解釈する)ことを勧めている。主節・副節資格逆転とまではいなくても、少なくとも両節が意味上等位接続されていると見なすような理論を構築できれば、上述の難問のもつ難儀は大幅に軽減されると思われる。そこで…

(15)John is clever enough, so one cannot arrest him.

(16)John is clever enough, so he will not arrest a wrong person.

(11) (再掲) John is too clever to arrest ϕ .

(12) (再掲) John is too clever to arrest a wrong person.

(15)(16)は意味的にも形式的にも等位表現であり、コンマ以前は事実としての属性記述を職能とする文であり、so 以後は、命題中核部分は「逮捕する」という事件記述ながら、modalityとしては非現実の判断であり、だからこそ can や will のようなepistemic 用法の助動詞が使われている。しかし、再掲した(11)(12)では後半(帰結部分)が to-不定詞であり、陳述力の乗物である時制をもっていない(もつことができない)から、独立文としての座りが良くない。だから変形文法の枠組内では、主節に埋め込まれる従属節として扱うしかその処理のすべがないと見なされるのである。しかし考えてみれば、もともと epistemic modality は話者が命題の probability に下す(現在の)判断の表現であり、時制の外に立つものである。日本語でも「だろう」「かも知れない」「に違いない」が過去時制を帯びることはなく、逆に「…ただろう」「…たかも知れない」「…たに違いない」のように、過去の出来事に対する現在の判断を表わすのはOKである。だから英語の epistemic infinitive が時制をもたなくても不合理ではない。陳述力を前半の[John is too clever..]の部分から借用している、と見て、Van Valin の Role and Reference Grammar の cosubordination (共従位接続)の思想を適用すれば難なく片づくことであるが、変形文法で epistemic な副節が real な主節に埋め込まれる?のは、論理的に矛盾である。

また、(12)こそ(17)John is clever, and \emptyset does not arrest a wrong person. のような等位接続における共通主語の省略という現象の拡張として処理できそうだが、(11)では省略されるべき John は後半の不定詞節の目的語であるから、それが主語である前半の陳述力の影響で省略されることはない筈だ、という批判にも答えなくてはならない。

5. 句構造観の革命 — 時制節が副節で、不定詞節が主節とは?!

チョムスキー派が腰を抜かすだろうが、(11)(12)で事実判断たる John is too clever という時制節が、epistemic な表現である to-不定詞節に埋め込まれていて、前者が従属節で後者が主節というのは、意味的に考えれば当然である。しかしそのような革命的かつ

結論として次のようにまとめることができる。すなわちSOOTH 2のもとでは：

- ①いわゆる too… to 構文では、常識に反し、too と時制と主格を含む前半の部分が従属節で、時制と主格をもたない to-不定詞節の方がmodus irrealisを帯びた主節である。
- ② to-不定詞節の資格は、John is too clever to arrest \emptyset . のタイプではVPであり、John is too clever \emptyset to arrest a wrong person. のタイプではTPである。
- ③従属節 John is too clever の主語 John と共指示のもとに「省略」される（無格・無音に留められる）主節のJohn相当成分は、VP/TPというそれぞれの構築段階にある主節の最高位の指定辞である。つまり主節といえども従属節の指示統制に依存する。

以上のようにGB理論の難問もSOOTH 2によればエレガントに解決された。

6. 結果補語構文の分析への応用

以上のような発想の転換・句構造観の革命は、いま扱った too… to 構文を分析するための緊急避難的な荒技ではない。英語タイプの「結果補語構文」（をもつ言語の同等の構文）を分析するのにも、主・副両節の資格の逆転という句構造観は必要である。

(18) John slept himself sober. 「ジョンは眠って酔いをさました」

(19) I washed the mud off the car. / I washed the mud away. 「…泥を洗い落とした」

(20) I washed the car clean. 「…車をきれいに洗った」

(18)は自動詞が「目的語」とその述語のペアを従えている異例の構文であり、(19)は他動詞 wash が目的語と述語のペアを従えているが、目的語が(20)のような通常期待されている目的語と異なる文例で、目的語と述語との叙述関係が断ち切り難いもの。(20)は述語が目的語と比較的離れ易く、なくてもよいが追加情報を提供するケースである。以上3例のうちで単節文として処理できそうなのは(20)だけであり、そこではAGo'を2段階にして上段のAGoに clean を収容すればよいが、(18)と(19)は複文と見なければならぬ。

(18)(19)が複文であることは、その日本語訳で動詞が二つ使われていることから明らかであるが、意味的に記述の主眼は(18)では「酔いをさました(しらふになった)」であり、(19)では「泥を(車から)落とした」であって、「眠った」や「洗った」はその実行手段や過程を表わす副詞的・修飾語的なものである。日本語訳では「眠って」「洗い」のように分詞形や連用形であって時制を帯びていないことに注目されたい。ところが英語では、時制をもっているのは slept/washed の方であって、意味上の記述の主眼は時制をもたない(もてない) [_{AP} himself sober]/[_{PP} the mud off the car]/[_{AVP} the mud away] である【なお、これらの句の範疇資格はSOOTH的には必ずしも正確でない】。だから英語では記述の主眼の方に従属節との建て前を与えざるを得ないのであるが、これを堂々と主節だと宣言できるように文法を改革ないし革命すべきであろう。そして記述の主眼に必要な陳述力(主張力)は、時制を含めて、形式的には主節らしい(意味的には)従属節の John slept…や I washed…から借用によって供給される、というふうに。

以上のように覚悟すれば、時制と主格をもつ見かけの主節＝意味的従属節は△として
 の株語となり、非主格の指定辞 self / the mud をもつ句が主節として浮かび上がるこ
 とになるであろう。この分析は(11)(12)のような too…to構文の分析を応用したものであ
 るが、ただ、これには欠点がある。(18)(19)では himself/ the mud に形式上の目的語と
 して対格を付与しなければならないので、それらに（たとえ sleep のような自動詞であ
 れ）動詞からの配率(high-sorting)⇨と対格照合子AGo からの引率(in-sorting)⇨が及ぶ
 ように句構造を設計しなければならない。だからやはり動詞と上述の[_{AP} himself sober]
 / [_{PP} the mud off the car] / [_{advP} the mud away]とは直列に連結されるのがよい、という
 ことになりそうである。とにかく結果補語構文はそれだけで一つの大論文を費やすほどの
 問題であって、ここでは十分に論じきれないので、別の機会に譲ることにする。

7. epistemic modal の「主語・一致・時制」の不思議

「…かも知れない」「…に違いない」「…筈がない」の意味に使われる may/must/can-
 not などは命題のprobability に対する話者の判断の表現であり、主語の負う義務や能力、
 つまり命題の実現に関する主語の責任を論じる deontic modalや時制を含めた命題の外に
 かかるものである。だからepistemic modal が「主語・一致・時制」をもつ、ということ
 は本来おかしいのであるが、現実にはそれらをもって表現されている。

この現象を説明するためには、節文をAGsPと地位づけた上で、更にもその上にかかるepi-
 stemicな述語（助動詞）の存在を認め、その指定辞（主語）の位置はAGsPの指定辞が外転
 して充填する、と考えるべきであろう。いずれにせよ He must be at school. など、同型
 異義の現象は変形文法等の形式文法ではうまく扱えない問題である。

参考文献

- Chomsky, N. [1995] *The Minimalist Program*. The MIT Press
- Van Valin, Robert D. (ed.) [1993] *Advances in Role and Reference Grammar*. John
 Benjamins Publ. Co.
- Langacker, R. [1995] 'Raising and Transparency' *Language*. Vol. 71, No. 1, pp. 1~62
- 田原 薫 [1997 a] 「新句構造文法S O O T h 2の基本理念 — 意味と形式の接点を目
 指して」『言語文化学会論集』第8号、pp. 59~71、言語文化学会。
- 田原 薫 [1997 b] 「新句構造文法S O O T h 2の基本理念 — 意味と形式の接点を目
 指して(続篇)」『言語文化学会論集』第9号、pp. 65~76、言語文化学会。
- 田原 薫 [1998 a] 「新句構造文法S O O T h 2の基本理念 — 意味と形式の接点を目
 指して(完結篇)」『言語文化学会論集』第10号、pp. 63~77、言語文化学会。
- 田原 薫 [1998 b] 「主語初頭生起説から見た英語の完了構文 — 過去分詞の復権と
 have の意味論」『ニダバ』第27号、pp. 57~66、西日本言語学会。